

麻痺側上肢の運動機能と日常生活動作での使用状況に乖離を認めた症例に対する一考察

○佐川 雅俊¹⁾ 石橋 ゆりえ¹⁾ 奥埜 博之¹⁾

1) 摂南総合病院 認知神経リハビリテーションセンター

【はじめに】

今回、実際は使用可能な麻痺側上肢にも関わらず、日常生活動作（ADL）では不使用を呈した症例の病態解釈と介入経過を報告する。

【症例紹介】

60歳代男性，右利き．診断名は右延髄梗塞で，既往歴に両側小脳，左中前頭回の梗塞があった．60病日目の運動機能はFugl-Meyer Assessment (FMA) の上肢項目30/66で，感覚機能は前腕以遠の深部感覚が軽度鈍麻であった．FIMは50/126，Motor Activity Log (MAL) の使用頻度0.6，動作の質0.5であった．ADLでの麻痺側上肢の使用はごく僅かである一方，訓練場面では無自覚にハサミや書字などの動作が可能であった．ジェスチャーの解釈と産出は可能で，パントマイムでは，無反応や道具との関係性不一致の錯行為を認めた．情報変換課題では「やってみないと分からない」と記述し，自ら知覚仮説を想起することは困難であった．

【病態解釈】

本症例は，麻痺側上肢に対する注意の低下と運動麻痺に加え，入力された視覚や体性感覚などの情報から知覚仮説の想起が困難な状態であった．これらによる麻痺側上肢の視覚・運動イメージの想起の停滞が，ADL上での不使用に関する自覚の乏しさの一因となり，訓練場面と使用状況に乖離が生じていると考えた．

【治療仮説】

課題時に視覚・体性感覚情報での差異の予測の言語化を求めることで，知覚仮説の構築が可能となると考えた．それにより，視覚・体性感覚イメージの想起が可能となることで乖離が改善されると考えた．

【訓練】

両手間での体性感覚の同種変換課題を実施後，視覚-体性感覚の異種感覚変換課題を実施した（期間は4週間，計8回実施）．

【結果と考察】

介入4週間後の運動・感覚機能はFMAが44/66に改善した．FIMは78/126，MALは使用頻度1.9，動作の質2.3に向上した．パントマイムの無反応は消失し，ADLではボタン着脱などの動作に改善を認めた．しかし，言語介助が無いと知覚仮説の想起は行えず，不使用に関する自覚にも不十分であった．

【考察】

知覚仮説の構築において，両手間での情報変換課題と情報分析の共有を行ったことは，ある程度有効であったと考える．しかし，不使用の自覚の改善は乏しく，使用状況の乖離は残存していたため，さらなる検討が必要である．

【説明と同意】

本発表に対し説明を行い，症例の同意を得た．